

〈首都〉をえがく

—《洛中洛外図屏風》と《江戸図屏風》をめぐる政治思想史—

松島 仁

本発表では、室町時代後期の《洛中洛外図屏風》から徳川時代初期の《江戸図屏風》を通覧し、〈首都〉をえがくことが内包するイデオロギーを分析していく。

発表ではまず、伝統的権威に収斂されていく諸職や、王法—天皇と相依関係にある仏法—寺社勢力を網羅的にとらえた洛中洛外図に、中世後期に急浮上したとされる天皇権威のアレゴリーを読む。洛中洛外図では、内裏と対をなす中心モチーフとして足利將軍の御所や徳川將軍の二条城が配される。足利將軍家から徳川將軍家にいたる京都の支配者は、政治体制(レジーム)を盛り込む〈器〉たる洛中洛外図のいま一方の中心に自らをすえることにより、内裏—天皇に対峙しながらも、その権威に保証され正統性を主張するのである。

政治体制を盛り込む〈器〉としての洛中洛外図の性格を顕著に示しているのが、片隻の中心に二条城を置き、徳川政権により占領統治された首都をえがく、〈第二定型〉と通称される一連の《洛中洛外図屏風》である。

旧山岡家本と勝興寺本を嚆矢とする〈第二定型〉では、二条城の圧倒的優位のもと二条城—徳川將軍と内裏—天皇が両隻の中心として対置される。それら葵と菊から構成される王法は、一双屏風の左右両端に配された東寺五重塔と方広寺大仏殿という国家鎮護の象徴、すなわち仏法に支えられ、徳川日本の宗教・政治思想の核『東照宮縁起』とも通いあう王法仏法相依の理念が示される。〈第二定型〉は徳川政権により神号が廃されたうえ社殿を破却・縮小された豊国社—豊臣政権など、徳川將軍権力に屈服した勢力を克明に描写するとともに、構図の中心となる二条城前には参内や行幸はじめ徳川將軍のための政治イベントが刻印される。

狩野光信や孝信ら狩野派正系の絵師を動員して政権中枢近くで案出されたであろう〈第二定型〉は、慶長に代わる元和の京都、つまり〈徳川の京都〉を視覚化したものであり、それは洛中洛外図の新たな型となって新しい時代の規範としての地位を獲得していく。徳川將軍家は洛中洛外図というメディアとそれをえがく狩野派という技術官僚(テクノクラート)集団を巧みに支配・編成し、自らの政治思想、国家ヴィジョンを造形化していくのである。

《洛中洛外図屏風》の成果にのっとり、三代將軍・徳川家光治世下の江戸の殷賑をパノラミックにとらえたのが、国立歴史民俗博物館本《江戸図屏風》である。

発表では、洛中洛外図の枠組みを借りつつ徳川家光の諸事績を散りばめ、公儀の御威光と〈首都〉たる江戸の繁栄をえがく歴博本について、そこに込められた政治秩序やイデオロギー、国家ヴィジョンを読み解き、制作意図を考究する。そのうえで歴博本をめぐる制作背景・筆者論に関しても従来の説に再考を促し、上杉本や旧山岡家本、勝興寺本《洛中洛外図屏風》に連なる、〈首都〉を統べる為政者と理想的な〈首都〉の表象としての〈首都図〉をめぐる関係の系譜に歴博本《江戸図屏風》を位置づける。